



## 便器の後ろ姿

マルセル・デュシャン生誕100年にあたる1987年、アメリカで「MARCEL DUCHAMP FOUNTAIN」と題する、デュシャンの便器をテーマとした展覧会が開催された。その展覧会のカタログを友人からもらった。緑色の表紙のステーグリッツが撮影した有名な便器の写真とFOUNTAINのタイトルというスタイリッシュなデザインが気に入ったが、裏表紙を見て驚いた。便器の後ろ姿の写真が載っていたのだ。日常では決して目にすることのないその姿がこれほど魅力的なものだとは、果たしてデュシャンは知っていたのだろうか？

便器が出品拒否された1917年の秋、ブロードウェイの写真館でデュシャンは合わせ鏡に映したポートレイトを撮影している。その写真には様々な角度からのデュシャンの顔が映っているが、その顔はすべて鏡に映った虚像である。実像はただ一つデュシャンの後ろ姿だけである。デュシャンと鏡、彼の謎を解く重要なキーワードである。そこに便器が加わると…。

1964年、晩年のデュシャンはステーグリッツの撮影した便器の写真をもとに描いたドローイングを版画作品としている。「Mirrorical Return」と題されたその作品では、鏡という言葉とともに、テキストの中の便器と尿の単語となるアルファベットが赤くなっている。デュシャンと鏡と便器、何かありそうな気がする。

デュシャンの便器は主にスキャンダラスな事件として語られてきた。私もそれ以上の興味を持つことはなかった、便器の後ろ姿を見るまでは。デュシャンの選んできた他のレディメイドと同じく、フォルムとしての美しさとともに、四次元の影としての男性用小便器の意味するものを、私なりに考えてみたいと思った。

藤本由紀夫(美術家)